

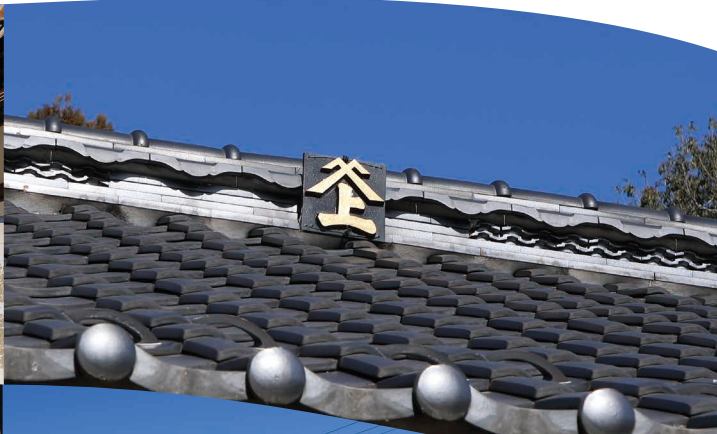
おでやれ文庫

あさもや
朝靄の里

水郡線沿線古民家群
福島県奥久慈

家を継ぐ人

棚倉町・塙町・矢祭町



令和七年度福島県地域創生総合支援事業
二〇二五年五月十五日第二版

「家を継ぐ人」の声から、
奥久慈の歴史が見えてくる。

八溝山地の山々の合間から朝靄が立ち昇る福島県の奥久慈。ときには龍が天に昇っているかのように見える幻想的な風景のなかに、棚倉町、塙町、矢祭町の約2万5千人の人たちの家と日々の暮らしがある。

それらの移ろいを何百年も前から見守ってきた家が今、古民家となり、変わらずに堂々佇んでいる。

その門をくぐった先にあるのは、代々の当主の先祖への感謝と今を生きる誇り、未来へ託したい思い。過去と未来が交錯する古民家で、当主たちの声を聞いた。

冊子の名、「おでやれ文庫」の「おでやれ」とは、八槻都々古別（やつきつつこわけ）神社の御田植で交わされる掛け声。「みんな集まれ、出ておいで」の意。

福島県指定重要文化財

棚倉町 八槻家住宅 八槻浩子

6

がくじん
楽人の住む家

棚倉町 石井家 石井義紀

8

商家から学問の場へ

埜町 荒川家 荒川紘

10

囲炉裏とこんにやくの室のある家
むろ

埜町 そめや 関大容

12

庄屋から昆虫館に生まれ変わる

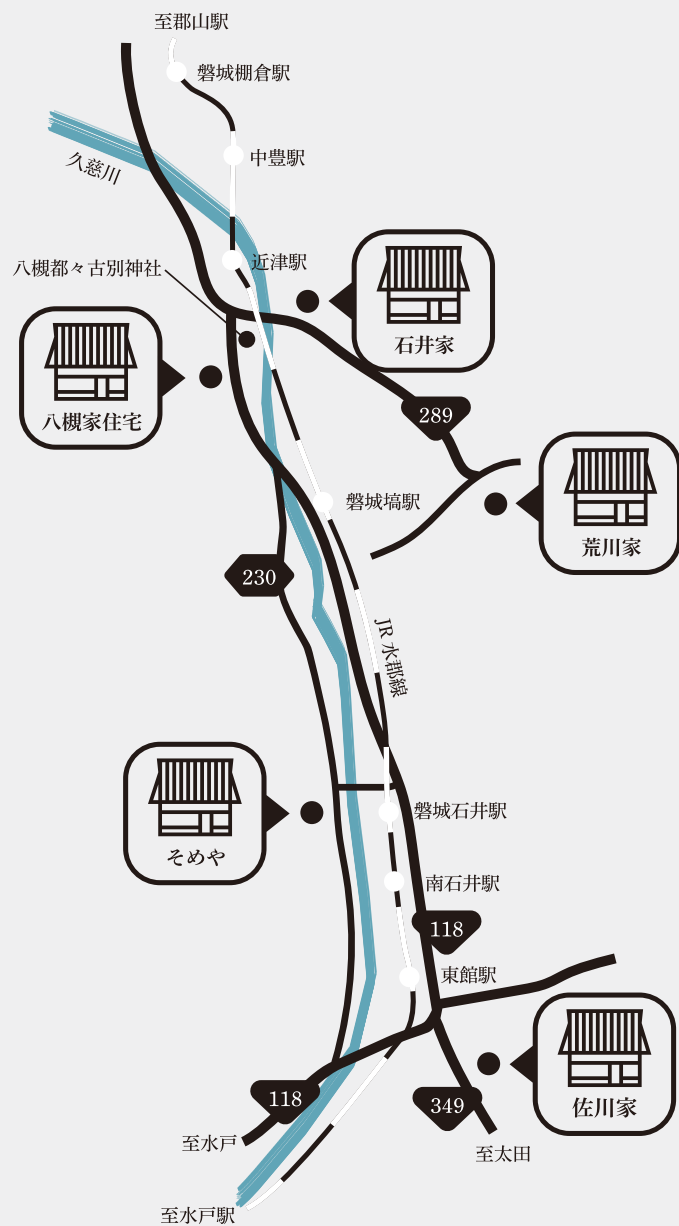
矢祭町 佐川家 石射正曜

ただあき

14

家を継ぐ人

棚倉町・埜町・矢祭町
水郡線沿線古民家群
福島県奥久慈



現在、八槻家住宅以外の各住宅は一般開放して
いないため、見学はできません。

企画・編集／一般社団法人ニワトコ（水郡線沿線古民家群活性化委員会）
Editor in chief／矢崎潤子 Editor&Writer／中野幸子
Photographer／芳賀元昌（表紙、P6-15 撮り下ろし分のみ）
Designer／松崎健輔（モノカム合同会社） 取材協力／石井義紀



1. 上段の間に座する浩子さん。2. 入母屋破風を冠した式台はケヤキの一枚板。3. 玄関の天井には八方睨みの雲龍がいる。4. 敷地の北側に佇む土蔵。

所在：福島県東白川郡

棚倉町八槻大宮

建築時期：1700 年代

面積：約 6050 坪

開館時間：9:00～17:00 観覧料：大人 300 円

高校生 200 円 小・中学生 100 円

休館日：12月29日～1月3日 ※観覧は要予約

(0247-33-0111 / 棚倉町教育委員会生涯学習課)

棚倉町 八槻家住宅

「宮司の夫亡き後、家を守る役目は義務から使命へ」 八槻 浩子

味耜高彦根命（あじすきたかひこねのみこと）と日本武尊を祭神とし、奥州一宮として崇敬されている八槻都々古別神社。中世には修験化し、以来、八槻家が別当職をも務めた。

八槻家が代々暮らした八槻家住宅は、薬医門形式の表門と脇門、茅葺きの主屋棟と書院棟、土蔵3棟からなる。主屋棟には修験者を接待したり宿泊させたりする間、書院棟には武家屋敷さながらの接客の間。その格式の高さから、規制が厳しかった幕藩体制下にも八槻家が「治外法権」だったことが垣間見える。

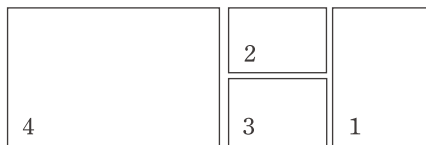
2013年に県の重要文化財に指定されてからも八槻家住宅を管理するのは、八槻浩子さん。宮司となる夫と結婚した当時を振り返り、「若いときは先が見えてなかった。夫もおおらかな人だったので」と笑う。夫の転勤生活を始めて八槻の地での暮らしが始まったのは35年ほど前のこと。夫を亡くし、現在宮司を務める娘たちと八槻家を守っていくなかでその歴史や地域の人々の支えに触れ、義務に感じていた八槻家の管理は使命になった。浩子さんは今、家を未来につなげていくべく、古文書の解説に精を出す日々を送る。



所在：福島県東白川郡
 棚倉町大字寺山
 建築時期：1871 年
 面積：約 1512 坪

棚倉町 石井家

「時代に添い、形を変えながら
 伝統を守っていく」石井 義紀



1. 茅葺きからトタンを経て銅板になった屋根。
2. 1941 年、勅使を迎える義一氏ら一行。
3. 「羊羹の間」こと上段の間。
4. 楽人の衣装を纏う義紀さん。

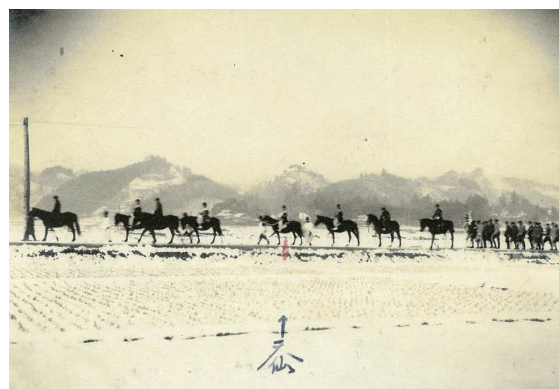
のだから。今は盆になると、遺影と神饌を並べて代々の先祖を迎えている。

屋根や土間など、家は時代に寄り添いながら暮らしやすくなるように変化させてきた。楽人としての役目も同様で、新しい風を吹き込みながら次世代に継承していく努力を惜しまない。

民俗芸能の伝承にも寄与する八槻都々古別神社。毎年旧暦の1月6日に楽人が豊作を祈って拝殿を舞う神楽「御田植」は、国の重要無形民俗文化財だ。

石井家は、社家（しゃけ）から楽人として八槻都々古別神社に仕えるとともに、地主として地域社会の維持に貢献してきた。現在は11代目当主の石井義紀さんが、曾祖父の石井佐左衛門義勝氏が建てた家と家督を継ぐ。

義紀さんにとって、家の上段の間は「羊羹の間」。小学生の頃、学校から帰ると祖父の義一氏がここで羊羹を食べさせてくれていた





所在：福島県東白川郡
 塙町大字常世中野
 建築時期：1700 年代
 面積：約 300 坪



塙町 荒川家

「歴史は、
 私たちが明日を生きる
 ヒントになる」 荒川 紘

江戸時代、塩や鉄、海産物を運ぶ人馬が往来し、

捉える荒川家は、街道の中継地。庄屋、造り酒屋だったのが、鉄の取り引きをするほか製材所を営み、水力発電所も建設した。

家を建てたのは、初代の荒川助惣重昌氏。商家としてはじまった荒川家だが、寺子屋や学校を営むなど、学問好きの先祖も少なくない。8代目当主の荒川紘さんが研究者であるのも、それゆえか。家には文庫用の土蔵があるが、穀物用だった土蔵も今は紘さんの書庫だ。

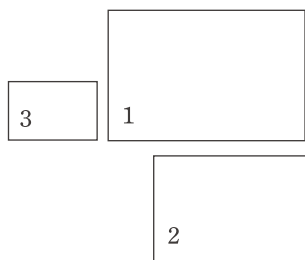
紘さんは、ギリシアにはじまる科学の歴史の研究を経て、現在は戦争と平和を語る日本史の著作

賑わいを見せていた平潟街道。その通りを正面に

に取り組む。そこではこの地域と荒川家の歴史も探りたいと話す。

「歴史を学ぶことは、明日を生きるヒントになる」。紘さんは、そうして先祖たちの歩みを細やかにたどっている。

1. 明治時代に建て替えた長屋門。2. 門の北側にある主屋の縁側に座る紘さん。3. 大正時代に新築した文庫。

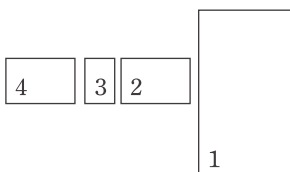


塙町 そめや

「みんながここに集まることが
維持のモチベーション」 関 大容



所在：福島県東白川郡
塙町植田下地内
建築時期：1859 年
面積：約 300 坪



1. 通称「そめや」の屋号は「ヤマダイ」。2. ケヤキの一枚板の欄間は富山県の職人が2年かけて製作。3. 囲炉裏の上にこんにゃくの室。4. 大容さん夫婦。

江戸時代、塙町には染屋が多数あったという。在来種のこんにゃく芋の生産もさかんで、「こんにゃく御殿」といわれる家も軒を連ねた。そめやにもこんにゃくの室があり、当時の地域性が色濃く残る。6代目当主の関大容さんは、あくで手を荒らしながらこんにゃく

そめやは、関家の初代である関藤次右衛門が染屋で財を成して建てた。

の加工の手伝いをしていた記憶を懐かしむ。囲炉裏もかまども現役のそめやは、現在大容さんの趣味のそば打ちや一日レストランなどイベントの場に。「古民家の維持は大変。でも、みんなが集まれる場所になるなら」と、大容さんは通いでそめやの手入れを続ける。

藍を栽培していた渋沢栄一の生家と類似したなりわいといわれている。

矢祭町 佐川家

「今の自分をつくった
原風景がある家」石射 正曜

所在：福島県東白川郡
矢祭町大字小田川
建築時期：1800 年代
面積：約 1000 坪



平安時代後期から戦国時代まで常陸国を中心に活動し、高野郡（東白川郡の前身）でも勢力争いを繰り広げてきた佐竹氏。その家臣だった佐川家は、後に庄屋や酒屋となり、集落のリーダー的存在となった。家からは集落の非常用備蓄穀物を貯蔵する施設だったことを示す掛け札が見つかっている。改修を重ねてはいるが、大黒柱や恵比須柱、梁など家の構造は建築当時のまま。繊細な組子の障子や欄間も残る。

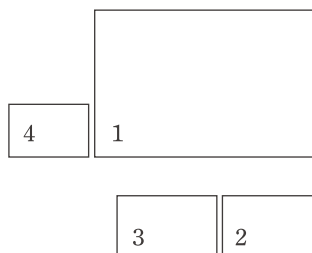
佐川家を受け継ぐ石射正曜さんは、10歳まで実家である佐川家で過ごしたという。

「離れて長くなりますが、ここで暮らした肌感覚はよく覚えています。四季を感じる楽しさや工夫がある古民家は、自然や日本の良さを再発見できるツールになるかもしれませんね」

現在、不動産関係の仕事に携わる正曜さん。その選択も佐川家で見えた景色が影響しているのかもしれないと分析する。

令和7年、佐川家は「虫の里・福島奥久慈昆虫館」に生まれ変わる。新たな息吹を宿す古民家。そこに多くの人が足を運んでくれることを、正曜さんは心待ちにしている。

※「虫の里・福島奥久慈昆虫館」は令和7年3月23日(日)にプレオープン。



1. 城郭に近いづくりの佐川家。2. 庭が見渡せる2階。3. 組子の障子と欄間は地域の職人作。4. 「幼い頃の遊び場はもっぱら山でした」という若き当主の正曜さん。

